編集後記

◆校正者は「最初の読者」といわれる。

的を射ていると思う。特に「市民の意見」編集スタッフの中で校正オンリーの自分は、及ばずともその役割を果たし、この立場を享受したいと思っている。

その意味でも今号で特に印象に残ったのは吉田栄司氏の「日本国憲法の成り立ちについて」。松本烝治らの起草した原案が占領軍司令部により却下された、という件り。「この動揺こそが『押しつけ』論の出発点である」と筆者は述べているが、これを読んでまさに我が意を得たという思いだった。

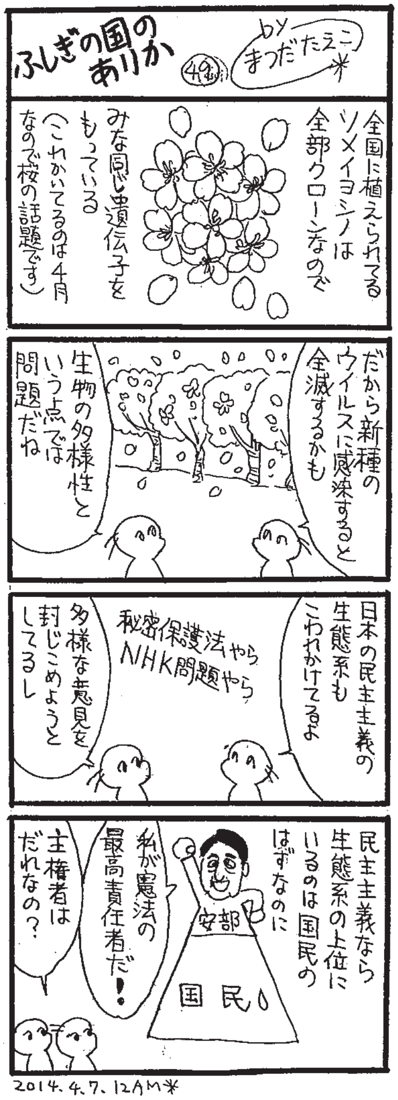
昭和22年のあの頃、新憲法の示す内容は小学生の自分に（そして周囲の大人にも）至極当然の、新しい希望のように思えた。それほど〝自衛と東洋平和を築く正義の戦い〟の実態と結果は痛烈に骨身に沁みていたのである。

そして67年後、政府は同じ言辞で〝国民のために〟と無理押ししようとする。その飽くなき情念は、きっと安倍および改憲論者に、〝押しつけられた屈辱憲法〟の伝承が息づいている故としか考えられない。

吉田氏はそれを裏書きしてくれた。最初の読者として、とてもうれしい。（いくみえいこ）

◆安倍首相が「地球儀規模」の外交を展開している。どこへ行っても、首脳会談が開かれるわけだが、そういうとき、前置きのように彼がもちだすのは、「自由・人権・平和……などの価値観を共有するわれら両国」という言葉だ。戦後そういう価値を教えてくれた米国とならともかく、いや、靖国問題が示すように、この国とだって、歴史認識問題になれば、大いに怪しいもの。過去何千年にわたり文明上の先進国だった中国・韓国とは、首脳会談を開く気配すらなく、当面は価値観の異同を問題にせずにすんでいる。微妙なのは対ロシア。領土問題で点をかせごうと、プーチン大統領と頻繁に会っているが、価値観には触れていないようだ。だが、いちばんの問題は、安倍が守るという「国民の平和と安全」をめぐる価値観をわれわれ日本市民と共有していないことだろう。（高橋武智）

◆米国政府が作った古典的な徴兵ポスターと言えば、大抵の人は見たことがあるだろう。星条旗のついた帽子をかぶった男が、正面から見る人を指さして、I want you と言っている。日本ではこのようにドラスティックな表現をすることはないだろうが、今の政治状況は、若者に対して政府が I want you と言っているのと同じだということを、当の若者（とりわけ10代の）たちはどこまで理解しているだろうか。心やさしい、賢明な若者たちの間から、たとえばネットを通じて「殺すな」運動がまき起こるというのは、私の夢に過ぎないのだろうか。

序でにつけ加えると、「市民の意見」の編集作業に参加したいという若い世代の有志はいないだろうか。後継者を育てるという重要な仕事が、忙しさのため後回しになっていることを恐れる。（本野義雄）

◆今号も珠玉の記事が満載です（自画自賛?）。多忙の中、ご寄稿頂いたみなさまに感謝！（野澤信一／本号担当）